

## 「剥がされた写真」のエピソードは、切ない...

ある福祉関係機関のHPの「職員の自由帳面」欄に、ある職員の手記「剥がされた写真」が載っていた。

その手記の概略は、次のようなことである。この職員の25年前の、いわゆる重症児のお子さんの家庭訪問の体験である。母親に健康状態を尋ねると「私は、風邪も引けないのですよ。病院に行く暇もない」との答え。後日の家庭訪問の時、母親が風邪気味なので、「ちゃんの痰の吸引はお母さんを見ていて解っているので、自分がちゃんを看ているから」と、母親を病院に行かせたところ、帰宅した母親は、病院のあとに美容院に行って髪をセットしてきたと喜んでいたという。

更に後日、母親から厚い手紙が届いた。手紙とともに写真の剥がれた身体障害者手帳が同封されていたという。手紙には、子どもが肺炎で2週間前に亡くなったこと、この職員が子どもを預かってくれた日に美容院で近所の人とお喋りができたこと、子どもがこの職員の顔をみると大喜びするのが親としても不思議だったことが書かれていたという。

最後の行に、子どもの写真は身体障害者手帳に貼った写真しかない。役場を通して手帳を返すと写真も返さなくてはならないので、手帳を直接この職員に返すと書かれていたという。

この記事を読んで、私も長年いろんなケースの家族にも係わってきたので、このエピソードに似た体験はたくさんあるだけに、何だか「切なさ」を感じてしまう(いつの時代も、母親の我が子への愛は、我が身を省みない程に献身的にすぎましい、普遍的なものとも云えなくもないが... )。

私は、以下のコメントをそのHPの掲示板に、その職員宛に投稿した。

【「剥がされた写真」のエピソードは、二昔前のことと片づけられないことと思います。在宅の方への福祉支援等は、二昔前よりは確かに数段整ってききましたが、特に母親はまだまだ、ある意味で家族の中ですら解放されない状態は、続いています。

いわゆる福祉関係者は、子どものことを思うばかりに、家族にあれこれアドバイスしがちですが、時にそれが、特に母親の心の負担を増すことになりかねません。

貴女も現場で色々なケースを抱えるご家族の支援に当たっておられると思いますが、これからもこのエピソードを原点として、母親の心情にも寄り添って上げてください。】

(2003年09月01日記)